
雪の花

文房具定規

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の花

【Nコード】

N3089W

【作者名】

文房具定規

【あらすじ】

ある満月の夜、学生の僕は喋ったことの無い同級生と鉢合わせした。彼女は妙な雰囲気を持つ人で、ゼミの中でも異彩を放つ人物だった。

そんな彼女から不思議な人だと笑われて思わず、お前もそうだといい返したら、なぜか次の日から付きまとわれるようになってしまった。

そんな僕の町ではずいぶん前から変な噂で持ちきりになっていた。それに興味を持つ僕は噂の真偽を確かめに首を突っ込んでいた。

嘘ならばただの無駄で済むけれど、真実ならば僕は、どうしたらいいんだろつか。

生きたい？

プロローグ(前書き)

こんな生活、きっと誰もが絶対に送りたくないです。

プロローグ

目を引いたのはただの偶然だった。

十五夜の日、僕は気紛れを起こして深夜、河原へと足を運んだ。手には月に供えるための月見団子を入れた袋がある。

気まぐれだった。ただ気まぐれに、思い付くままに、僕は月を見たいと思つて家を出ていた。団子は歩く途中にあるスーパーで適当に買った。

独り暮らしでアパートを借りてる僕には、こんな放浪をしても怒る人はいない。したことは全て因果応報に自己完結させる。それが家を出た僕に課された絶対条件だった。

だから、こんな深夜にさ迷うことを決めた僕がすること全ては僕自身が起こしたことであり、僕のみが責を負えば、それで済む問題だった。

だからこれは、ただの偶然だった。
たまたま河原の目に留まった先で、たまたまそこに彼女が居たというだけだった。

別に何かあつたわけでもなく、何の必然もない、たまたまが重なつただけの彼女との邂逅。

「貴方も月見？」

河原へ降りる階段がある場所で、ひっそりとただ佇んでいただけの、その瞬間まで存在しか知らなかった同級生との、

「だとしたら、変わった人ね」

それが、初めての会話だった。

関係

誰にも見られていないかと思っていたのに、それは間違いだと次の日思い知らされた。

「お前、昨日河原で倅枚ゆきひらを口説いたつてのは本当なのか？」

朝、僕は一限を終えて机でこれから受ける講義の準備をしていた。そこへ隣に座ってきた僕の数少ない友人が話し掛けてきた時発した最初の一言がそれだった。

彼の名前は浅井博臣あさいひろおみ。

人当たりのよい肉体派の青年。頭はあまり良くないが、遅しくバランスのとれた体格通りに運動系にはかなり秀でている。あまり運動は得意でない僕にとっては羨ましい限りの話だ。

一応、僕の幼馴染みでもある。

「……何で知ってる」

僕は机にバッグを置きながら博臣の質問を無視して問い返すと、「お前の幼馴染みとあの倅枚が昨日河原で仲良く喋ってたぜ！」つてゼミのUFO研究会の連中が騒いでたからさ、だから気になつてな」

そして博臣は苦笑いを浮かべた。彼はあまり人と関わろうとしない僕をいつも気にかけてくれている。僕はそれを鬱陶しいと思う反面、とてもありがたいとも感じている。しかし、この話題にだけはあまりいい顔はできなかった。

「まあ確かに深夜だったから勘違いするかもしれないけどさ……とどうか、何で話題になるのさ。たかだか同じゼミ生が話してただけだろ」

「そりゃ、深夜に顔見知りの男女が喋っているのを見たら噂にもなるさ。それがあの倅枚と『人形細工』透君が相手だったら尚更な。騒ぎにもなるだろ」

「……みんな暇だな」

僕はあまりの馬鹿らしさに呆れて言い放った。

そう言うなって、と博臣が言いかけたところで授業開始のチャイムが鳴り、教授が教室に入ってきた。

倅枚の話題はそこで終わった。

*

倅枚雪華。それは昨日河原にいた女の名だ。

彼女は僕や博臣と同時期に大学に入学した生徒のこと。といって僕がその存在を知ったのは大学に入学してから二年目の、ゼミを選ぶ時期になってからのことだった。倅枚と偶然同じゼミになり、それから一年の間を共にし、彼女が誰とも必要最低限の会話しかしていない事にある時気づいた。

あまりゼミに積極的でない僕も似たようなものであったが、そんな僕から見ても倅枚は異質な存在だった。

それから博臣から倅枚についての様々な話を聞いたが、正直信じられないようなものばかりだった。

いわく。

成績が常に全教科 A A で、運動神経が妙に高く、いつも笑顔のくせに喋ることは滅多に無く、目を引く美人であるのに授業以外では殆ど見かける事がなく、かと思えば変なところで見かけることがある。……とか、なんとか。聞きもしていない事までも含めて、色々並べ立ててくれた。

どの話も見分かった一部のこと以外は眉唾物だったが、倅枚が変な人物だとは、それだけで十分に理解できた。

だからといってそれで何かが変わったわけでもなかったが。

それからゼミ以外で倅枚との接点は全くなかった。だから倅枚と噂になるようなこともこれまで一度たりともなかった。

それがたまたま出会った昨日、よりもよって同じゼミの人間にその現場を見られてしまうとは思いもしなかった。

世間は狭い。

だけど分からない。

そんな噂をなぜUFO研究会が流せたのか。どうして深夜あんな河原に来ていたのだろうか。

どうしてなのだろうか。

授業が終わったところで僕は沸いて出た疑問を博臣にぶつけてみた。

「そいつらがそんな時間に居たのはUFOを呼ぶためだってよ
暇なのか。どいつもこいつもこのやろっ。」

「月見をしに行ったお前もずいぶんどだと思っけどな。つかそっだ、俺も聞きたいことがあんだけどさ」

「うん？」

「お前どうして河原に行こうと思ったんだよ。そっいった行事なんてお前興味ないだろ？」

「ただの気まぐれ」

「……は？」

「なにさ」

「……ふふ……はは、気まぐれ？ お前が？ ふふふ、はははははは」

何だか分からない笑い声をあげる博臣。その声質はとても不愉快だった。

「おいおい、冗談はよせよ。操り人形みたいに人任せしかできないお前が気まぐれを起こした？ この十数年したこと無い自発的なことをお前がしたってのかよ。それって本気？ おお、マジなのか。へえ、珍しいこともあったもんだ。……いや、それともあれか……」

「？」

「ん？」

「お前まさか、例の噂が気になったとか……そっいうことか？」

「この男はどうしてこっくらいん鋭さを持ち合わせているのだろうか。」

「何だ、凶星か？ まあお前の勝手だから俺は特に気にしないけどさ。大概にしとけよ。そういうの」

「別に……言われるまでもないよ」

はなから分かっていることを言われて僕は少しひねた口調で答えた。博臣はそんな僕を見て肩をすくめると唐突に話題を変えてきた。

「で、さ。この際どうなんだよ」

「は？」

「だから倅枚のこと。口説いたのか？ 成功したのか？ 会話はしたんだろ？ そこんとこ詳しくさ、な？ 馴染み」

博臣は何かを期待するような語感で重ね重ね訊いてきた。何を期待しているのかは知らないけれども。

「……口説いてない」

「やっぱそうか」

「だから成功もない」

「おうおう。で？」

「……」

信じるよ。親友。

「おい、どこ行くんだよ」

「静かなところ」 僕は教室から出ていった。

*

気まぐれであったのは嘘ではない。

ただ、その気まぐれに他意がなかったというのには語弊があるのは間違いない。

無意識のきっかけ。

僕の奥底にあった、期待していたもの。

「……」

もっともそれは、彼女と会ってしまった時点で諦めていたことだった。

あの瞬間にもう、その期待はなかったに等しいのだ。
倅枚雪華。

河原で僕と会話した女。

*

本屋で情報誌を読みながら僕は、ふと昨日の出来事を思い返していた。

月を見に行った僕を、変わった人と呼んだ女。

しかしそれは、そう言う彼女だって同じだ。倅枚だって、月を見に行っていた。貴方もと言っていた彼女から、それは十分に読み取れる。

だから僕は、思わずらしくもなく、

「君だって変わってる」

と言い返していた。

本当に僕らしくない、波風を立ててしまうような発言だった。

なぜそう言ってしまったのかは自分でも分からない。

よく周りから人形と揶揄されてきた僕にとって、変わってるという言葉は珍しくもない。なのに倅枚に言われたときに、お前にだけは言われたくないと、咄嗟に思ってしまった。

似たような人間だと思っていたからだろうか。

おこがましくも、自分と相手を。

「……いや」

今さら、後悔したところで仕方がないことだ。言ってしまった事実は変わらないし、今となってはどうでもいいことでもある。

それよりも、今向けるべきは今後の自分の身の振り方だ。

UFO研。

彼らには静かに平穩に暮らしたいという僕の気持ちを汲んでもらいたい。

今度博臣に、噂を流した奴に灸を据えておくようにでも頼んでおこうか。

ただでさえ嫌なゼミが、そいつらのせいでさらに出づらくなってしまう。

彼らが河原にいたというのは別に構わない。

ただ、河原で月を見上げながら、ポツポツ会話していた僕らを見ただけで、口説くとか、そんな厄介なものに結びつけるその思考が始末におえない。

僕たちはそんな関係じゃない。

あの場においてはただ互いに伸びる自分の歩く線がたまたま交差しただけであって、複雑に絡まってしまわないことにはそんなことは二度と起きはしない。

僕はわきまえたし、倅枚だってきつとその程度で済ませているはずだ。

もう僕とは無縁なことだ。

だからまあ、いい。昨日は僕が軽率だった。それでいい。深く考えるべきじゃない。UFO研については博臣に任せて終わり。これ以上は泥沼だ。

人の噂は七十五日という。

新しい話題が来れば早々に忘れ去られるということ。特に僕のような影の薄い奴はさらに著しいだろう。人形の行き先なんて、誰も追いかけてりしはしない。

噂は日々更新されるものであり、広まりやすければまた、消えていくのも早いものだ。

だからいつか、町にはびこる噂も、消えていくのだろう。きつと。

僕は手元の雑誌に目を落とした。

『滅びは実話！？ 日本は沈む？』

『都市にはびこる噂、それは真か偽りか！？』

「……………」

いつの頃からだろうか。僕たちの国には滅びの噂が流れていた。

満月の夜に、日本は滅ぶ。

どこからか生まれたその噂は、本当かどうかも分からないの人々の中に根強く残ってしまったている。

信じている人はそれほどいない。

信じてない人もそれほどいない。

所詮は噂。ただの噂。

でもそれぞれは、少なからずいるという。

とは言っても、かつて何度かメディアで特集が組まれたことがあったそれは深く町中に浸透はしたが、今はマイナーな雑誌で時おり触れられることしかなくなっている。

噂は伝説に、都市伝説のようなものになった。

しよせんは一過性の話題の一つとしてしか捉えていなかった。

いつかは忘れ去られる存在。それに食いつき続けるのは極一部。

僕のような、一部だけだった。

「これ下さい」

小声で噂話に興じていた受付のお姉さんにその本を渡し、マニユアル通りの返事を返され、僕は雑誌を受け取った。

「有難う御座いました」

どうもと軽く会釈して、僕は店を後にした。

さて、どうしようか。

買った雑誌を小脇に抱えてから考える。

今日の僕の日程は二限と五限だけだ。今二時限目が終わったばかりだから、あと二時限分の暇がある。

当時の僕は何を考えてこんな微妙な時間割を立てたのか。今の僕には分からない。

少々昔の自分に殺意が沸いた。

苛々することが起きたばかりのせいか、またしても僕らしくない考え方だった。

「パソ同行こうかな」

この時間なら暇潰しに絶好な相手もいる。

そうと決まればと僕はその場所に向かって歩き出した。

*

「おい、いるか？」

ガラガラと扉を開けながら中にいつもいる女に話し掛けた。

返事はなかった。

だが、人はいた。

山のように積まれた資料の中、数台あるパソコンの中で最も薄いのを前にして、何かを一心不乱に打ち込んでいる。

中々に狂気を感じられる光景だった。

「……。まあ、元気そうで何よりだけどさ」

僕は右手人差し指で頬をかきながら溜め息を吐き、ゆっくりと女の側に寄る。

「かちかたかたかたかちかちかちかちかちかちかちかちかちかち」

狂気そのものだった。

そいつは、僕の存在を欠片も感じていないようで、同じような言葉を繰り返し呟きカタカタと一心不乱にキーを叩いていた。

よく見ると女の耳にはイヤホンがくつついていた。

成程、それなら気付くわけがない、と僕は納得した。

「……………」

どうしようか。

話し掛けたいのは山々だが、この状態でいきなり話しかけても、思わぬことには催涙スプレーを吹き掛けて対処してから考えるようなこいつのことだ。迂闊な行動はできない。またそんな二の舞をこつむるほど僕は馬鹿ではない。

ガタンと僕は側の椅子を引き寄せ座り、パソコンを起動させた。

彼女が気付くまでのんびりネットサーフィンでもすることにした。

幸いにして、僕には時間が余りある。

さて、どこのサイトに入るうか。

「あれ？ 透君じゃないですか。いつの間に来てたんですか？」

点けたパソコンをシャットダウンさせる。

パソコンを終了しますとパソコンは自分が眠りにつく合図をしてくれた。

おお、喋るようになって来たんだ、と少し感心した。

「あれー？ 確か透君はこの時間授業があったと思ってたんですが、はて私の記憶違いですか？」

「それは前学期の話だろ。ちゃんと言ったのにまだ覚えてないのか」
呆れ声を出すと、女はパンと両手を合わせた。

「ああ、成程成程、そうでしたそうでした。ふふ、すいません。私一度覚えてしまったことは中々修正効かないんですよね。でもどうです？ いっそ私と一緒に生きてくれると約束してくれれば修正できるかもしれませんけど？」

「覚えなくて結構です」

「相変わらずつれない人ですねえ」

彼女はヘラヘラと笑い、右中指で眼鏡の中心を少しずらした。

彼女の名は橘姫織^{たちばなひめおり}。

滅びの噂を探っているうちにどこからか現れ、よく話すようになった、やけにずれた性格のみようちきりんな女。

どういうわけなのか、なぜか橘は初めて会った時から僕を知っていた。

私みたいな人がいるなんて変な人もいたもんです、と、初めて会った時に橘はそう笑って言った。橘もまた、滅びの噂の真偽を確かめようとしている人間だった。

僕のことをどこで知ったのかは聞いても教えてくれなかったが、きつと噂を調べるその過程で知ったのだらうと、勝手に考えている。そう考えなければ気味が悪かった。

本当なら僕はこういう気質な人は苦手だ。だけど滅びの真偽を確かめるためには一人では限界がある。

橘には僕にはない情報収集能力がある。それは僕にとって必要な力だった。

だから僕は、滅びの情報が欲しいとき大体ここに来るようにしている。

「橘、言っとくが僕はお前とそういう関係を築きたくてお前の口車に乗ったわけじゃないぞ。あくまで同じ目的だから共同戦線を張っただけだ」

「いいじゃないですか、滅るもんじゃなし。一緒に愛の巣を育みましようよ透君」

「お前との関係は協力者だって言ってるだろ。噂の真偽がどうなのか、それを得るための」

「分かってますよ、たく。またつれない人。私とんだピエロですよ。ね。ザクザクと私の心突き刺されです。なんですか、そんなことして楽しいですか？ 爆笑必至ですか？ 抱腹絶倒ですか？ 自分は大事な情報持つてこようとはしないくせに」

「その代わりに、お前の手足となって動く約束しただろ。持ちつ持たれつ。そういう関係になろうと最初に言ったのはお前だろ」

「ええ、確かにそう言いましたよ。でもそこはケースバイケースつてのがありましてね。透君、しっかりしてくださいよ。透君はそんなのくらい理解してもらわないと。何か言わなきゃやってくれないそこの人種と貴方は違うんですから。あまり私を失望させないでくださいよ」

「分かった、分かった」

「ならいいんですけどね」

橘は僕の答えに満足したのか、笑顔を浮かべて偉そうに頷いた。

実は橘、この言い方から分かる通り、こうみえてかなりの人嫌いである。

橘に声を掛けられた翌日に博臣に訊いてみたところ、橘姫織という人間はかなりの変わり者であるという話を聞くことができた。

橘は気に入った人間と話す時はやたら明るく威勢がいいが、気に入らない人間が相手だと徹底的にまで拒絶するようなタイプらしい。何がどうしてなのか、そんな気難しい気性を持つ女に、僕は目を

掛けられてしまっている。

あまり波風を立てるのは好きじゃない僕にとっては厄介な話ではある。が、橘に関しては実はそこらへんを気にする必要のない唯一の相手であったりする。

なぜならこの女は、波風を広げられる人間関係を持っていない。自分さえよければそれで良いとする非常に付き合いつらい女のため、同学生たちからはほぼ避けられてしまっているのだ。

僕を噂にすらなれない影無しと例えるなら、橘は噂すら逃げ出す腫れ物扱いな人格破綻者だ。

そんなわけで、言ってしまうえば橘は一々何かを気にする必要が全くない相手であり、僕にとっては非常に不本意だが、博臣以外に何の気なしに相手をできるのは誰だと訊かれれば、迷わずこの女の名をあげることだろう。

「はあ、全く。私の愛する透君。私の気持ちというのをいつ理解してくれるのやら。透君にはどれだけ私が期待しているのか理解してもらいたいです。私のこの溢れんばかりの心が一字一句間違ひなく透君に伝われば、きっとあまりの感動に涙を流すことのように」

「いや、多分引くと思う」

「あらん酷い、ぐすぐす」

「いい歳をして泣き真似をするな」

「ああ、もう酷い。もう、透君は私が嫌いなんですか？ 嫌いだって言うなら今日は一体何をしに来たんですか？ あ、もしかして今優越感浸ってます？ 私が苦しむ様見て楽しんでますか透君くう、なんて変態。でも、そこがまた憧れる」

「……」

相変わらず気味の悪い女だ。

「で、透君は今日何しに来たんです？」

泣き真似を止めた後、姫織は今までとうって変わった愉しげな口調になりながらそう訊いてきた。

「ここに來たって事はまた滅びの噂を調べに來たんでしょうけど、

まだ透君に知らせるべき情報は仕入れてませんよ？ それとも何か調べたいことでもできましたか？ どうします？ やっちゃいますか？ いっちゃりましようよ」

はしゃぐように橘は言い、側の椅子をぐるぐる回した。

用事がないけど暇だから来たとは言いつらい空気が流れ始めたが、僕がそんなこと気にするわけがない。

「これ」

雑談の口火にと僕は持っていた雑誌を机の上に置いた。

「……ああ、これですか」 彼女はその雑誌を手に取った。愉しげだった表情は一転した。

「また透君は随分つまらないものを話の肴に持ってきましたね。こんな三流雑誌じゃ大した話もないじゃないですか」

橘は不満そうに口を尖らせた。

「文句言つなよ。今となつちゃこの噂扱ってくれてるのなんて、そんなんしかないんだから」

「こんなもの……パソコンですぐ当たるのに」

橘は口を尖らせてパラパラと雑に雑誌をめくった。

「まあ折角透君が持ってきてくれたんですから読めますけど……面白くないことしかやつぱり書いてないですけど。でも、いいでしょう。透君の労力に免じて参考文献には加えておきます。滅びの噂、霞みたいに分らないことだらけですから。ふう、ああ、早く知りたいこの噂。この真実」

「……」

また自分の世界に入ったかこの女は。

「橘、お前はこの噂を知って一体何がしたいんだ」

「はい？」

「こんなの知ったところで何か得をするわけもないし、仮にこれが真実だとしてどうにかできるわけでもない。嘘であればそれ以前に徒労だ。それでもお前は どうして知りたがる？」

「私は気まぐれで動いてるだけですよ？」

「気まぐれ？」

キョトンとした表情を浮かべる橘の言葉に僕は肩透かしを食らった気分だった。

「たった、それだけか」

「む？ 妙に引つ掛かる言い方しますね透君。じゃあ逆に問いましたよ。透君は何でこんな徒勞にその首を突っ込むんですか？ 貴方だって、その無駄なことをしようとしている一人でしょう？」

「それは……そうだけど」

「変な透君。どうしたんですか血迷って」

「いや、お前ってなんか無駄なこととか嫌うような人間に見えたから、ちよつと意外だった」

「気まぐれと無駄は違いますよ透君。気まぐれは人が誰しも起こす行動です。操り人形透君には分からないんですかね？」

「……僕だって、あるさ」

「おや、あるんですか。へえ、それこそ私にとっては意外ですけどね。ちなみにどんな気まぐれ起こしたんですか？」

「……月見」

「くあ、ぷっははははは」

「……」

大声で笑いやがった。

「いやあ、さすが透君。私の斜め上の行動をあっさりしますね。はは。月見。かぐや姫でも探してたんですか、はは」

「……」

てい。

「あいたつ。な、何しますか透君。女の子に手をあげるなんて紳士の風上にも置けないですよ！」

「生憎人形なんで」

「さいつてえええ。こんな時だけ逃げ口上にそれ使うなんて。貴方絶対良い死に方しませんからねっ」

「好きに言え」

ぶつきらばうに僕はそう言った。

そこで不意にさつきまで橘のしていたことが頭に浮かんだ。

「橘」

「何ですか人畜」

「そついえばさつきカタカタと無心にキーボード叩いてたみたいだけど、一体何やってたんだ？」

唐突に橘の体が硬直した。

「……………」

はて、僕は今何かおかしいなと言ったか？

「あ……………ああ……………」

「……………おい、橘？」

「忘れてたああああっ！！！」

突然橘はそう絶叫したかと思うと、慌てた様子で今まで開きっぱなしになっていたディスプレイに身体を向けて様々な文字列を打ち込み始めた。

「……………なにやってんだ？」 状況がよく分からない僕はそう問いかけると、橘はさつきより遥かに早いキータッチをしながらこう返してきた。「今日提出の課題まだ終わってなかったのをすっかり失念してたんですよ！ 今日出さないと留年確定のヤツっ。ああああ！ 透君の突然のご来訪にすっかり舞い上がってこんな初歩的なミスをしたことがあっっ！！！」

「……………」

何が何やら。

「なあ、橘。その課題ってどのくらいあるんだ？」

「326ページです！！！」

「……………」

そんな半端のない量の課題が近日中に出されたとは到底思えない。

「重ねて悪いが橘、それっていつから期限設定されてた？」

「九ヶ月前からですよ！！！」

九ヶ月前。

九ヶ月前？

「…………なあ」

「はいつ!？」

「それだけの時間がありながらなんで出来てないんだ？ お前なら課題なんて三日程度で…………」

「ずっと遊んでました」

「…………」

馬鹿がいた。

「…………邪魔になるようだから僕は失礼するよ」

じゃ、これと言って僕は席を立った。

「ああ!! 見捨てるんですか!？ こんなにも苦しんでる美少女を目の前にして透君は見捨てるんですか!？ 酷い! 薄情者!」
「頑張り」

僕は部屋の扉を開けた。

「見捨てた!？ 見捨てましたか今透君!？ 助けてくださいよ透君! ああつ、本当に行くつもり? 透君! もうつ、馬鹿あつ!」

ガチャリと静かに僕は戸を閉めた。

さて、では時間潰しに図書館へ行こう。

「あ、透君」

「うわっ」

閉めたばかりの扉がわずかに開き、橋が隙間から顔を出した。思わぬことに口からは勝手に戸惑いが飛び出していた。

「うわっとは何ですか。うわっとは」

「うるさい。まさか出てくるとは思わなかったんだ。それより何だよ。課題は手伝わないぞ」

「分かってますよ。ただ友達として忠告しようかと思いましたがね」

「忠告?」

「ええ。透君? あんまり所構わず男女でいちゃつくのは透君のキアラじゃないですよ?」

「……っ!？」

言いたいことはそれだけです、と橘は最後に気味悪い笑顔を見せて部屋に引っ込んだ。

残された僕はどうしたらUFO研を地獄に叩き落とし、廃部に持ち込めるかを本気で考え始めていた。

閑話

変わってる、か。そうね、確かに私は変わってるかもしれない。
うん、あ、そっか。私、変わってるんだ。

怪訝な顔しないでよ。私、人からそう言われたの、初めてだから
ちょっと新鮮だったの。

でもそっか。変わってる、か。うん、私は変わっているんだ。

私はね、優しく風が吹いてる夜に外へ出るのが好きなんだ。

切なくて寂しげで肌寒いけど、でも柔らかく包み込んでくれてる
ようなこの澄んだ空気が気に入ってるの。

一番好きなのは、春に一本だけある桜の木の下でその空気の中、
風で花びらが散っていくのを見つめて月を見上げるの。

次の春に見てみたらいいよ。とても幻想的で忘れられない思い出
になるだろうから。

ふふ、気の持ちようだっていいじゃない。

少しでもそれが記憶に残るものになれば、それは何よりも素晴ら
しい宝なんだよ。

貴方にだってあるはずよ。

色褪せない、大切なものが、きっと。

閑話 2

「はっ、はっ、はっ、はっ……！」

一人で広場を走り続ける男の姿を僕が見かけたのは、一年ほど前の買い物帰りのことだった。

初めは気にもとめなかったけれど、通るたびにそうしている彼に僕はいつしか興味を持った。

どうしてそんなことをするのかと僕が訊いた時に、彼は走りたいたいと答えた。

何度か会ううちに分かったことは、彼が走るようになったのは噂が流れるようになった最初期の頃からのことだということ。

幾度も会って分かったのは、走って怖いのを抑え込んでいるんだということだった。

最後に会った日に、彼はこう言った。

「分からないんだよ、俺。この世が終わるってどうなんだよって。

みんなは嘘だつて言うけどさ。嘘だなんて確証も、何にもないんだ

ろ？ 実際どうなんだよ。なあ、分かるかよ？ お前なら……なあ、

柏木。俺も……堪えられねえんだよ」

それから彼のことを見ることはなかった。広場に遊具が導入され、子供たちの遊び場と化したそこに、悩みを持つ人間は場違いだったのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3089w/>

雪の花

2011年11月22日01時58分発行